

## エステル記2章7節 「エステルに働く神の摂理」

### 1A 先行する神の働き

1B アハシュエロスの酒宴

2B 王妃ワシュティの不従順

3B エステルの選抜

### 2A エステルに備えられる神の恵み

1B 美貌

1C 外見による評価

2C 両親の死

3C 内にある美

2B ユダヤ人の女

### 3A モルデカイの業績

### 4A 予め備えられた良い働き

1B 当事者には理解できない出来事

2B 御心のままに実現されるご計画

## 本文

エステル記 2 章 7 節を開いてください。私たちは聖書通読の学びをしていますが、今日からエステル記を学びます。午後礼拝で 1 章から 3 章までを一節ずつ読みます。今朝は、2 章 7 節を読んで、エステルという女性とその背後にある神の摂理を学んでみたいと思います。

モルデカイはおじの娘ハダサ、すなわち、エステルを養育していた。彼女には父も母もいなかったからである。このおとめは、姿も顔だちも美しかった。彼女の父と母が死んだとき、モルデカイは彼女を引き取って自分の娘としたのである。

私は、みなさんにエステル記を前もってぜひ読んでくださいとお願いしました。お読みになるとすぐに分かりますが、一度読めば最後まで読みたくなる書物です。なぜなら、一つ一つの話が一つの目的のためにつながっているからです。ちょうど、とても質の良いドラマのように、話の一つ一つに伏線があり、そしてクライマックスに向かって収束していくように、エステル記に出てくる一つ一つの場面は、決して無駄にされることなく神の目的に向かって取りまとめられていきます。このことを「神の摂理」と呼びます。

エステル記の舞台はペルシヤ帝国であり、その首都シュシャンであります。そして時代は、アハシュエロスが王であった時とあります。一般の歴史では、アハシュエロスはクセルクセス(Xerxes)であり、彼の治世は紀元前 485 年から 465 年でした。ペルシヤの黄金期にいた王です。エズラ記

6章と7章の間に起こった出来事です。つまり、すでにユダヤ人がエルサレムに帰還して、神殿を再建した後の出来事です。思い出してください、帰還民の人数は五万人にも満ちませんでした。大多数のイスラエル人はエルサレムに帰還せずに、そのままペルシヤの各地に留まっていました。

したがって、私たちがこれまで学んだエズラ記とネヘミヤ記は、エルサレムに帰還したユダヤ人たちの話でしたが、エステル記は帰還をしていない離散のユダヤ人たちの記録になります。近現代のユダヤ人たちのことを考えていただければ納得がいきます。19世紀の前後にユダヤ人たちがパレスチナを郷土として帰還してきて、1948年にはイスラエルが建国しました。しかし、世界中にユダヤ人たちは未だ大勢散らばっています。バビロン捕囚時のユダヤ人も、解放後に帰還する人々もいましたが、そうでない人たちも大勢いたのです。

私たちはエズラ記とネヘミヤ記で、エルサレムに帰還した民が周囲の敵から激しい反対に遭ったことを読みました。神の民が主の命令に従って、その神殿と町を建てることには、困難がともなう敵の反対があることを私たちは知りました。だから、安全圏の中にいようと私たちは考えてしまいます。「神の働きの中に深く携わらなければよいのだ。そうすれば霊の戦いもないし、それなりにクリスチャン生活を送ることができる。」と。おそらく、ペルシヤ時代の離散ユダヤ人も同じことを考えていたかもしれません。

しかし、そうはいかないことをエステル記がじっくりと教えてくれます。自分が神に選ばれた民であるなら、敵の策略から免れることは決してできないことを教えてくれます。エルサレムにおらずとも、離散のユダヤ人はペルシヤにいるかぎり絶滅に危機に瀕したのです。私たちも同じです。キリストにあって神があなたを選ばれたのであれば、敢えて神の働きの中に自分を捧げず安全圏で行こうとしても、神が愛してやまない対象を悪魔は虎視眈々と滅ぼしてしまおうと企んでいます(1ペテロ 5:8 参照)。しかし、神はそれでもご自分の愛する、ご自身が選ばれた者たちのために、敵を勝利させないように守ってくださいます。

### 1A 先行する神の働き

1章は、神がご自分の目的を実行されるはるか以前に、すでにその目的を実行するための備えをしておられることを教えています。

### 1B アハシュエロスの酒宴

ペルシヤはもちろん、異教的な国です。イスラエルの神も律法も知らない国ですから、何が大切かと言いますと、その富と栄誉です。一般の歴史を見ますと、クセルクセス、すなわちアハシュエロスは、紀元前481年に大規模なギリシヤ遠征に行きます。この時は483年です。おそらく、その遠征のためにペルシヤ全土を自分の支配にしっかりと統合させるために、全州の有力者や首長たちを集めたのでしょう。そして、なんと180日にも及ぶ宴会を催したのです。彼の支配は、ホドからクシュまで(1節)とあります。ホドはインド、クシュはエチオピヤです。エチオピヤと言っても、今のス

一ダンも含みました。とてつもない領土を治めていました。そして、180日が過ぎたら、今度は7日間に及び、首都シュシヤンの城にいたもの全てのために宴会を催しました。

この絶大な栄華を誇るペルシヤ帝国の中枢で起こった出来事が、神がご自分の民のために救いを与えるきっかけとなるということが大事です。私たちキリスト者は、このようにして生きています。あまりにも小さな存在に見えます。そして一般の歴史書の中で、キリスト者が大きく取り扱われることはありません。ましてや、世俗的な動きの中にどうしてキリスト者が関わっているのか？と思います。しかし、主は働いておられるのです。

イエス様のことを考えてみましょう。主はご自身がお生まれになる時が、そうでした。ローマが共和制から帝政、帝国になる時でした。皇帝アウグストが住民登録をせよという布告を出して、全世界の住民がそのために動かねばなりません。その中で貧しいユダヤ人であるヨセフが、臨月になっているマリヤと共にベツレヘムに向かったのです。しかし、それが全世界を救う王の誕生のために用いられました。

## 2B 王妃ワシュティの不従順

アハシュエロスが宴会を催している時、王妃ワシュティも婦人たちのために宴会を催していました。七日目になって、王が酒で上機嫌になって、その美しい容姿を民と首長たちに見せびらかしたいと思いました。それで王妃を呼ぶと、なんとワシュティはそれを拒んだのです。王が非常に怒り、その憤りが彼の内で燃え立ちました。そこで側近の者たちが、この不従順に対してどのような処分を下すべきか、王に提案をしました。もしこのまま放っておけば、ペルシヤ中で妻の夫に対する軽蔑と怒りが起こる、そうすれば社会全体の秩序が崩れるということで、ワシュティが王妃の位を剥奪することを進言しました。それで、ワシュティが王妃ではなくなりました。

このような話は、世の中ではごくありふれたことでしょう。王家におけるお家騒動が、全国に波及したということです。しかし、これを神はご自分の御心の中で動かしておられたのです。ワシュティが王妃の位から退くことがなければ、次にエステルが王妃になることは決してなかったからです。

神がご自分の目的を実行される時に、またご自分の国を拡げられる時に、こうした否定的な出来事さえ用いられて、事を運ばれます。例えば、パウロがヨーロッパへ宣教旅行を始めることになったその前に、彼はバルナバと激しい議論となりました。マルコを旅行に連れて行くかいかないかで、激しい反目となり、パウロはシラスを連れて、バルナバはマルコを連れて別行動を取りました。主の働きに従事している者がこんなことになってしまうのは、決してほめられたものではありません。しかし、この反目がなければパウロはもっと自由に小アジアでの宣教はできなかったでしょう。そしてマケドニアへの旅に導かれなかったと思います。さらに、パウロはマルコと後に和解しています。本当に私たちは今、自分の身に起こったことが神のご目的のためにどう用いられるか分かりません。

### 3B エステルの選抜

そして、2章に入ります。2章は、ギリシヤ遠征の後のアハシュエロスを描いています。遠征は失敗に終わりました。そして、その失意の中で彼は王妃のことを思い出しました。自分が独りであることを思い出したのです。けれども、すでにワシュティが王妃から退けられたことは、法令として定められたので変えることはできません。そこで、王に仕える若い者たちが、国中の未婚の娘たちを探して、そこから王のお心にかなう乙女をワシュティの代わりに王妃としてください、と提案します。そして王妃を選ぶための、美人コンテストが始まります。その中で一人のユダヤ人がいて、彼女の名がエステルでありました。

### 2A エステルに備えられる神の恵み

そこでエステルが選ばれるための時代背景に、神の恵みの御手があっただけでなく、彼女自身の人生にも先行する神の恵みがありました。

### 1B 美貌

#### 1C 外見による評価

エステルは、「姿も顔だちも美しかった」とあります。しかし2章を読み進めると、それが王の彼女に好意をもった理由ではないことを知ります。彼女がモルデカイの言いつけたことをしっかり守り、そして彼女やその他の女たちの監督官の指導にしっかりと従い、その従う心が王に気に入られたことを知ります。

もちろん、女性の美貌は神の造られたものです。しかし、美貌は必ずしも祝福とはなりません。いや、その人生を狂わせる呪いとさえなりえます。それは、周りの人々が、自分ではなく、自分の外側によって付き合うからです。男性であれば、もちろんその外見に引き寄せられます。けれども、自分の心や思いを気づかう人ではなく、その美貌と付き合っています。女性であれば、妬みの対象となります。自分のわずかな欠点をあげつらい、批判したり、しかとしたり、陰湿ないじめをしたりします。

私が思い出す救いの証しは、化粧品会社の広告モデルになったヨアンナ・スラヴァンさんのことです。その体と顔そのものが商品になったのですから、人々から賞賛の目が集められるのですが、付き合いおうとして来る人々は、自分を商品としてみなすような人々ばかりが集まってきたということです。私は想像するしかないのですが、これはかなり自分の人格形成に歪みをもたらすのではないかと、お話しを伺って感じました。美貌が、祝福どころか、むしろ、意味ある人と人との関わりを妨げる呪いとさえなります。

また美人は、自分の品性を培う機会を失いがちです。良い環境の中で甘やかされてしまい、真に人格や品性を磨くことをせずに時を過ごしてしまいます。

## 2C 両親の死

しかしエステルは、そうではありませんでした。ここ 7 節を見れば、「彼女には父も母もいなかった」とあります。どのように亡くなったのかわかりません。けれども、幼い時に両親が死んだので、彼女は従兄弟のモルデカイに養女として育てられました。

彼女は、その不幸に対してなぜ神がそのようなことを許されたのか、と疑って、苦みを抱くこともできたことでしょう。その反対に、人生に起こったその試練によって、それが神からの賜物だとしてその中で品性が練られることもできました。おそらく後者であったでしょう。「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。(ローマ 5:3-4)」

人は困難や試練に遭うときに、二つの道に分かれる分岐点に立ちます。なぜ神が、私にこんな酷いことをするのかと疑い、苦々しくなり、罪を犯すことと、この試練によって神に近づくことができたことを喜び、感謝し、その中でますます自分の内にキリストが形造られることの二つの道の分岐点に立ちます。苦々しくなるか、さらに聖められるかは、互いに近くに存在します。その違いは、「私」「自分」であります。「神が、なぜ私をこんな酷い目に合わせるのか。」と自分を愛し、自分を大事にするのか、それとも神を愛して、神をほめたたえるのかのどちらかなのです。

## 3C 内にある美

エステルは、この困難の中で品性が練られました。美貌も神がお造りになられたものですが、内なる美しさこそ、神が女性に与えられる尊い賜物です。「あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。(1ペテロ 3:3-4)」

## 2B ユダヤ人の女

そしてエステル記を読みますと、はっきりとそこには反ユダヤ主義がペルシヤ内に存在していたことがわかります。従兄弟であり、エステルの養父でもあったモルデカイは、エステルに自分がユダヤ人であることを明かしてはならないと言いつけています。彼女の名はハダサと言って、ミルトスを意味しますが、エステルという「星」という意味のペルシヤ語名を使っていました。ユダヤ人であるというだけで、蔑まれる空気がペルシヤの中には存在しているようでした。

これは、私たち東アジアに住む人々には理解は難しいと思いますが、離散ユダヤ人が数多くいるアメリカでさえ、ユダヤ人の中には姓を変えている人がいます。例えば、今の国務長官ジョン・ケリーが、ユダヤ人の血を受け継いでいることは、最近のニュースに出ました。父方の祖父母が、1900年にユダヤ人名を持っていたけれどもそれをケリーに変えて、ユダヤ教からカトリックに改宗したということ、ケリーは後で知ることになったと言います。

ですから、エステルはそのようなことにおいても、自分の人格が強いものに形成されていったに違いありません。それは頑なさにあるような強さではなく、逆境に屈せず正義を選びとるところの強い意志でしょう。このように、エステルはユダヤ人絶滅の危機を救うための器として、自分が生まれた時から整えられた訳です。

そこで思い出すのが、パウロです。もしパウロがいなければ、キリスト教は今のようにならなかつたはず、ユダヤ教の一派として埋没し、私たちも救われていなかったと断言できるでしょうが、その彼を神は、生まれた時から選び分けていました。パウロ自身が、「けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださいました…(ガラテヤ 1:15)」と語っています。

彼は異邦人への宣教者になるために、神はギリシヤ社会にいるユダヤ人の家庭に生まれさせました。小アジアのタルソというところで生まれました。ですから、彼が宣教の働きをする時に、ギリシヤ語を流暢に話しただけでなく、ギリシヤの文化や彼らが何を考えているのかをよく知っていました。けれども彼は、聖書からイエスがキリストであることを論じることができなければいけません。律法について、その行いによっては決して神の義に到達できないことを知っていなければいけません。それで彼はエルサレムで、一流の律法の専門家であるガマリエルの下で学び、律法を厳格に守るパリサイ派に属していました。さらに、彼は生まれた時にすでにローマ市民でした。ローマの市民権は特権に数えられるものでした。もし彼がローマ市民でなければ、あれほど広範囲に宣教の働きができなかつたでしょう。ですから、神が彼を生まれた時から選び分け、恵みをもって召してくださいましたのです。

### **3A モルデカイの業績**

そしてエステルを王は王妃とします。その後の出来事です。モルデカイはシュシヤンの城で王に仕える役人の一人でした。彼は、王の暗殺を企んでいる二人の役人の会話を聞きました。彼は王妃となったエステルに伝えました。そしてエステルがモルデカイの名で王に告げました。そして、その二人を王は処刑しました。このことが年代記に書かれて、そしてこのことでユダヤ人全滅の危機を回避する、大きなきっかけとなるのです。

モルデカイは、まさかこの報告が、後でユダヤ人の命を救うために神が用いられるとは思っていませんでした。思い出すのはヨセフです。彼は牢屋にいた時に、パロの献酌官の夢を解き明かしました。献酌官はパロのところに戻って、ぶどう酒をパロの杯に入れることとなりますから、どうか私をこの牢屋から出してくださるようお願いしてくださいと頼みました。ところが彼はすっかり忘れていました。そして二年の月日が経ちます。その時に彼は思い出すのです。そしてパロが自分の見た夢をヨセフに伝えて、それでヨセフが解き明かして、彼がパロの次に大いなる者となりました。

自分のしていることが、報われないと感じる人が多いかもしれません。しかし、神はご自分のみこころのままに、私たちの忠実で、真実な行いを決して忘れないでいておられます。そして時が満

ちれば、それらのことを大きなことに用いられるのです。

#### 4A 予め備えられた良い働き

##### 1B 当事者には理解できない出来事

私たちは、次のことがこれらのことから分かると思います。今していること、今、自分の身に起こっていること、自分の周りに起こっていることが、神の大きなご計画とどんな関わりがあるのか分からないけれども、神はそれらをご自分の御手の中に収めておられる、という事実です。

イエス様が弟子たちの足を洗っておられた時に、「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。(ヨハネ 13:7)」と言われました。まさに、このことです。主がなさっていることは、今は私たちには分かりませんが、後で分かるようになります。

##### 2B 御心のままに実現されるご計画

開きたい御言葉は、エペソ2章10節です。「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」神は、私たちをご自分の作品であると仰っておられます。その作品のギリシヤ語は、英語で「ポエム」つまり詩という意味の言葉になっている言葉「ポエマ」です。私たち一人一人が、神のとしてのポエム、詩なのです。神の恵みのすばらしさを物語る作品なのです。そのために、神は、良い働きを私たちに予め備えてくださっています。そして、時が来て、その良い働きを現してくださるのです。

そしてそれは、私たち自身が輝くためのものでは決してありません。これを間違わないでください、神の御国のゆえに全ての事を働かせておられます。エペソ1章10-11節を開いてください。「時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。このキリストにあって、私たちは彼にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従って、このようにあらかじめ定められていたのです。」キリストの御国が到来するために、また霊的な御国が拡大するために私たちはその一部になっています。したがって、良い働きというのは私たちの事ではなく、神の御国なのです。